

分に如何ばかりの確實なる史料を包含せるかを謂ふ點に着眼し、便宜上建國説話、國王の世系、支那との交渉に關する記載、他の異民族との交渉に關する記載、國內の事件に關する記載の五項に區分して考究を積み、該紀の記載に於て國王の世系なきは高句麗より傳はりし史料なるべく、建國説話、地名人名等にも同様に認め得らるゝも勿論新羅人の潤色の迹も見ゆ、其の他に至りては大抵新羅人や高麗人の腦裏より造作したるものならむかを結論す。終に眞番郡撤廢、玄英郡移轉の事情及び高句麗建國の年代に就ての考を附載せり。

『契丹人の衣食住』(松井等)は南北朝以來隋唐を経て、五代に至る迄斷續的に支那文物の輸入せられたる契丹人の衣食住に就きて、其の支那輸入に係らざる契丹人固有の風俗を闡明せむことを目的とし、契丹人の射獵生活、衣服、飲食、住居に就きて研究せり。

『完顔氏の曷懶旬經略』(尹瓘の九城の役)『隋』(蒲盧毛柔部に就いて)『池内宏)は女眞の酋長完顔盈歌即ち金の穆宗が四隣平定に當り南下して其の勢力範圍に入れたる曷懶旬が廣義の咸興平野なることより研究し、彼が高麗との

關係、曷懶旬經略、高麗江地方討平、完顔烏雅束の曷懶旬征服及び高麗との衝突を調査し、尹瓘の九城の役は出師の決定、九城築設、完顔氏の兵との交戦、講和を考究す。

『元朝牌符考』(箭内互)は元朝以前の牌符より辭き起して漢代の銅虎符、戰國魏の虎符、竹使符、漢代の木傳信繡符より三國兩晋南北朝唐の制に及び、宋符金符の詳細を叙し、施きて元朝の制に及び、其の効用、特典、世襲濫用、出納、牌名の由來を究め、併せて驛券の委細に論及せり。

以上四篇皆鮮滿研究上の好文字にして別に完顔氏の曷懶旬經略に尹瓘の九城の役地理圖あり。(東京帝國大學文學部發行、價不詳)(那波)

### ●通論考 古學 文學博士 濱田耕作著

文學博士濱田耕作氏の近業にして、考古學の本質と其の研究方法を通論せるものなり。本書は著者が嘗て「考古學の榮」と題して本誌に連載せる稿に一大補訂を施したる本文にこれと殆んご等しき苦心を以て蒐成せる六十五枚の豊富なる圖版を如へて成れり。其の内容を瞥見す

るに、本文は四六版二百三十頁、五編に分れ、第一編は序論にして考古學の性質と其の他の學科との關係を説き、第二は資料編として、斯學の取扱ふべきあらゆる遺物遺跡に關する記述を試み、挿むに關係の主要なる研究論文を以てし、第三編は科學的考古學の進むべき殆んど唯一の途なき學術的發掘調査に就いて、其の準備、注意、方法等を擧げ、第四編にてはこれより得たる資料に基き求むべき研究に關し、考古學上特殊の方法と時代の考定、文獻學との交渉等の主要なる問題を論ぜり。第五編は餘論にして考古學的出版、遺物遺跡の保存、修理、博物館等に關する記載を試み、なほ附録として歐米に於ける考古學の主要なる参考書目の解題を以てせり。記述簡潔而も結構整然實に考古學の教本たるの感を與ふ。蓋し斯學入門の良參考書なり。

此の本文に對し圖版の類は著者が其の考古學的出版の條にて高潮せる主意に依つて細心の注意を以て選擇せるものに係り、單に圖が記述のみにては表はし難き部分を補足するのみにごまらず、進んで眞の考古學が如何に圖寫に負ふの多きかを表し、また本文中に挿入の圖を通

觀するに於いて其の間自ら斯學への興味を惹起し、併せて其の一斑に髣髴せしむるにつごめたるは從來の著者に多く類を見ざる處例へば圖版第四十一、四十二の寫眞の撮影に關する注意の寫眞、第四十九版以下の集成圖、第五十一、二の層位狀態を示せる圖の如き、これを資料編に挿める三十一の多枚の圖版がよく内外の遺物遺跡を網羅せると共に稀に見る處なり。加ふるに一個の圖云へどもこれを收むるには周到の注意を加へた、此の點に於いて本書は本文の記述上關係少なからざるベトリ博士の「考古學の研究法及其目的」に並び稱せらるべきなり。されば本書の本文が初學者に對して稍簡に過ぐるの憾みは此の圖版を有用するに於いて或程度までは除かるべし。

更に本書が其の記述に於いて専門の立脚地より斯學の性質に確然たる解決を與へ、其の取扱ふべき資料の解説にては豊富なる識見に基きて廣く全般に亙り簡潔の裡に含蓄ある記述を以てし、また調査及び研究の方法に關しては歐洲學者の知識に加ふるに多年の經驗を參酌して著者獨自の新しい方式を示せる處學界の矚目たるもの多し

これは従來の我が考古學關係の著述が多く遺物遺跡の解説たるにこゝまゝよりして、やゝもすれば骨董視され初學者を誤る状態ある斯學の現状に對して、これが科學的立脚地を明にして、まさに一個の科學たるの面目を意識せしむるもの、我が考古學が其の進運の途に就きて、これを修めんとする者多きを加ふるの今日に於いて、本書の出版は此の點にても斯學の發達上深き意義を認めらるべきなり。(大燈閣發賣、價三、五〇)(梅原)

## ●天心全集

日本美術院編

美術學校長の、子を去つて自己の理想の實現を期して日本美術院を創めた岡倉覺三の十年祭に當つて同院の人が敬虔な態度で編纂した同氏の全集である。全篇三冊から成り、一は曾し雜誌等に載せられた論文及び報告書詩歌、書翰、講演、筆記を、明治二十四年に美術學校での講義「日本美術史」を收め、巻頭に小照、小傳及び年譜が添へられてゐる。二は英文になつた著作の蒐集であつて、「The Heart of Heaven」を名づけられてゐる。内容は主として英詩、書翰、劇詩と物語、論說、報告の類であ

るが、同氏の主著として歐米に高名を走せた The "Ideals of Th. Fast," "The Awakening of Japan," 及び "The Book of Zen" の三書が收められてゐないのは其の理由を解するに苦む所であつて、甚だ遺憾に感ぜられる次第である。併し此の三書の抄譯は共に第三冊目の「歐文著書抄譯」の内に收められて居るので其の大意に通ずる事は出来る。三冊目は此の三書の抄譯を、外に米國の雜誌、報告書等に載せた論說四篇の抄譯を附し、附録として東京帝國大學での講義泰東巧藝史の梗概を、知友遺族の追想録が添へられてゐる。本書の内に特に吾々の注意を惹くものは美術史の講義である。明治二十四年のものであつて、本邦に於ける最初の美術史であるを稱せられてゐるが其の透徹せる意見に富んでゐることは感歎に堪へない。英文の「東洋の理想」と「日本の覺醒」は共に一種の文化史であつて外國文化の輸入よりも其の文化を統一した内部の力を非常に重要視してゐる所に其の書の特徴がある。岡倉氏は此の書によつて歐米人に對し日本の偉大なる文化の爲めに頗る氣を吐いたものである。今は兩書共に稍稀觀に屬して其の複刻を見なかつたのを甚だ残念に思ふが、幸